



高野山の春 鶯谷御子大明神社前にて この日(4月8日)は雪が舞っていました。

霞宝館だより

題字・畚野光義師

霊宝館だより 第126号

平成30年4月24日発行

和歌山県伊都郡高野町高野山306

公益財団法人高野山文化財保存会

高野山霊宝館

電話0736-56-2029

URL <http://www.reihokan.or.jp>

利用案内

■開館時間

■11月1日～4月30日

8時30分～17時00分

■5月1日～10月31日

8時30分～17時30分

■休館日 年末年始のみ

■拝観料 大人 600円

高・大学生 350円

小・中学生 250円

高野町に住居票がある方、高野町内の学校に在籍する学生の方は入館無料です。

■専用駐車場あり

春期企画展

「室町時代の高野山」

開催中～7月8日(日)まで

第126号 目次

春期企画展のご案内……………2～3

新指定品の紹介……………4

高野山の古建築 第三十回……………5

高野山の考古学 (十八)……………6～7

古絵図で巡る高野山探訪 (その七)……………8～9

高野山の文書 (十三)……………10

高野山霊宝館からのご案内……………11

霊宝館の庭園43……………12

毎月21日(弘法大師の日)ご来館の方にプレゼントあり！ ホームページ割引券もご利用ください

平成30年度 春期企画展

「室町時代の高野山」

平成30年 4月14日(土)～7月8日(日)まで

前期 平成30年 4月14日(土)～5月27日(日)

後期 平成30年 5月29日(火)～7月8日(日)

会期中無休

※国際博物館の日に協賛し、5月18日(金)を無料開館日とします。



重文 厨子入金銅水神像 金剛峯寺



重文 舞楽装束類 (薔薇に反橋文様水干・袴) 金剛峯寺

主な展示品

■ 絵画

重文 地藏菩薩像

県指定 騎獅文殊菩薩像

未指定 秘剣大師像

未指定 弘法大師四社明神像

未指定 三十番神像

宝寿院〔前期〕

桜池院〔後期〕

竜光院

桜池院

親王院

室町時代(二三三八～一五七三)は、南北朝の動乱にはじまり、安定期を経て、戦国乱世の群雄割拠へと至る激動の時代でした。そのような時代でも、後醍醐天皇、足利尊氏や義満ら室町幕府歴代の將軍といった権力者たちは高野山に参詣し、その信仰を深めていきました。同時に、権力者たちの援助を受けて高野山も霊場としての地位を高めていきました。本展覧会では、激動の時代において高野山はどのような歴史を紡いでいったのか、室町時代の高野山を紹介するとともに、高野山霊宝館に収蔵する同時代の名宝の数々を展示します。



重文 高麗版一切経 金剛峯寺



県指定 騎獅文殊菩薩像 桜池院 [後期]



重文 地藏菩薩像 宝寿院 [前期]

未指定 薬師三尊八大菩薩十二神将像
未指定 武田信虎像

円通寺 持明院

■彫刻
未指定 简型厨子入愛染明王小像 (五指量愛染)

金剛峯寺

■書跡

国宝 宝簡集・続宝簡集

金剛峯寺

重文 高麗版一切経

金剛峯寺

重文 後小松天皇宸翰秘调伝授書

西南院 [前期]

重文 梵本大般涅槃经断简

宝寿院 [後期]

重文 宋版一切経

金剛峯寺 [後期]

未指定 聾瞽指帰寄進状

金剛峯寺

未指定 聾瞽指帰 (複製)

霊宝館

■工芸

重文 厨子入金銅水神像

金剛峯寺

重文 舞装束類 (薔薇に反橋文様水干・袴)

金剛峯寺

未指定 孔雀文馨

蓮花院

◎文化財の状況により、やむをえず変更する場合があります。

同時開催 特別展示「仏涅槃図と仏さま」

このたび、愛知県立芸術大学様より、国宝 仏涅槃図 (金剛峯寺蔵) の模写が奉納されました。これを記念して奉納作品を展示するとともに、お釈迦さまや涅槃図に登場する仏さまの絵画を展示します。

※ミュージアムトーク

(学芸員による展示解説)

5月18日(金)、6月9日(土)

いずれも13時30分より 約1時間

予約不要、参加費無料 (要拝観料)

※ミュージアム法話

(お坊さんによる法話と展示解説)

5月12日(土)、6月16日(土)、7月7日(土)

いずれも13時より 約45分間

予約不要、参加費無料 (要拝観料)

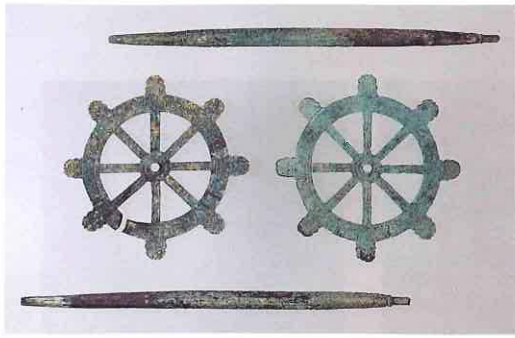
新指定文化財の紹介

平成三十年三月十四日付で「金剛峯寺境内出土の地鎮・鎮壇具」（金剛峯寺蔵）が和歌山県指定文化財（美術工芸品（考古資料））となりました。

新指定

県指定 金剛峯寺境内出土の地鎮・鎮壇具 金剛峯寺

①金剛峯寺大門（史跡金剛峯寺境内）出土品…



徳川家霊台出土品 輪宝・櫛
埋納時は櫛の上に輪宝が刺さっていました。



高野山霊宝館出土品
賢瓶と内容物

- 賢瓶一点（身一点・蓋一点）、輪宝二点、櫛二点、五色の石（梵字墨書）五点、土師質土器皿七点
- ②徳川家霊台（史跡金剛峯寺境内）出土品…
 - 家康霊屋…輪宝八点、櫛三点
 - 秀忠霊屋…輪宝六点、櫛三点
 - 帰属不明…櫛九点
- ③高野山霊宝館八大童子ほか保存施設発掘調査地（金剛峯寺遺跡）出土品…
 - 賢瓶一点（身一点・蓋一点、内容物が墨書された紙包十六点）



大門 輪宝・櫛出土状況



大門出土品 五色の石

④「宝性院跡」教化研修道場発掘調査地（金剛峯寺遺跡）出土品…
折敷二点、京焼施釉陶器皿二十三点
⑤金剛三昧院（史跡金剛峯寺境内）出土品…

賢瓶一点（身一点・蓋一点）、中国銀十八点、台座石一点、土師質土器皿二十四点

堂塔を建立する際にはその土地の神を鎮め、祀るために地鎮や鎮壇という修法が行われ、土中に祭祀の道具が埋められます。今回指定を受けたのは史跡「金剛峯寺境内及び金剛峯寺遺跡」から出土したもので、室町時代から江戸時代にかけての地鎮具（建物中央部分の地下に埋納する賢瓶や五色の石、皿、古銭）、鎮壇具（堂塔の庇や基壇の八方に埋納する、棒状の櫛に輪宝を挿したものです）。③は霊宝館の収蔵庫建設に際しての調査で発掘されたもので、蓋をした賢瓶の中には、貴金属や貴石（金・銀・真珠など）、生薬（人参・牛黄・石菖蒲など）、香料（丁香・白檀・沈香・鬱金など）が十五種類、それぞれ名前を記した紙に包まれて入っており、五穀が入った包みのみ、破損した状態で見つかりました（合計十六包）。地鎮と鎮壇はのちに合わせて行われましたが、当初はそれぞれ別に行われており、またその方法や道具も流派などによって違いがあります。地鎮・鎮壇が別々に行わ

れていた頃の、高野山の重要施設の遺品として、また保存状態や出土状況が良好なことからも今回の指定に至りました。（福形安希子）

※「金剛峯寺境内出土の地鎮・鎮壇具」を霊宝館本館隔廊に展示中です（一部除く）。春期企画展開催期間中（七月八日まで）は展示いたします。

◎三月九日（金）、文部科学大臣に重要文化財指定が答申されました「紺紙金字法華経（八巻、十一世紀、金剛峯寺）」は東京国立博物館にて、特集「平成三十年新指定国宝・重要文化財」展で公開中です。（平成三十年五月六日（日）まで）



紺紙金字法華経 巻第一 巻首

南海高野線復旧

台風二一号の影響で昨年十月より運休しておりましたが、南海高野線高野下駅～極楽橋駅間が三月三十一日（土）によりやく復旧いたしました。

連載

高野山の古建築
第三十回 重要文化財 金剛三昧院 経蔵

鳴海 祥博



背側面の全景 断面五角型の「校木」が井桁組に積み上げられている。土台は太くて丸い束で支えられ、風通しの良い高床となっている。



経蔵の正面遠景 鬱蒼とした木々に囲まれ、ひっそりとたたずんでいる。



床下の様子 びっしりと並んだ丸太は「根太」で、その上に床板が張られている。こんなにたくさんの根太を架けるのは何故だろう。賊が床を破って侵入することを防ぐ工夫なのだろうか。



軒廻りの詳細 軒は厚い板を並べて造られている。床、壁、軒、すべてが木材で囲われた大きな木箱のような倉である。肘木（ひじき）と斗（ます）で桁を支える構法は他の校倉では見られず、これも特徴的である。

の御利益に護られ、経蔵は八百年間、聖教什物を秘蔵してきました。

経蔵は正面四・五m、奥行き三・五mの「校倉造」という形式の倉で、十三世紀初め、国宝多宝塔と同じ頃に建てられたと考えられています。

校倉は奈良東大寺の正倉院が有名です。奈良時代には大寺や地方の役所にたくさん建てられたようですが、平安時

代以降は土蔵が普及して校倉は激減します。平安時代以降、室町時代までに建てられた校倉は現在四棟しか残っていません。その一つがこの金剛三昧院校倉で、とても貴重な存在です。

経蔵は、礎石の上に長さ五〇cmほどの太くて丸い束柱を建てて土台を組んでいます。通風を考えた高床の倉庫となっていて、土台には根太を渡して厚い床板を張り、その上には断面五角型の角材、「校木」を井桁に組み合わせ、それを十五段積み上げて箱形の倉の本体を造っています。「校倉造り」と言われるゆえんです。

校倉造りには柱はなく、積み上げられた校木が壁であると同時に、荷重を受ける柱の役割も果たしています。柱と梁で組み建てる日本の伝統木造建築の中にあつて、これほどとも特殊な構造ですが、地球規模で見渡すと北半球に広く点在していて、その伝播とルーツの探求は興味あるところ

です。

校木を積んだ上には、屋根を形造り、その上に檜皮を葺いていきます。屋根を造るとき、普通は屋根の勾配に合わせて、一定間隔で垂木という部材を配置しますが、ここでは垂木の代わりに分厚い板をビッチリと張り詰めています。これは「板軒」という形式ですが、こんな厚い板を用いるのとても珍しいものです。

床から壁、屋根まで分厚い材木で囲まれたこの経蔵は、まるで大きな木の箱です。木箱は温湿度の急激な変化を和らげる特質があるとされていて、この建物は紙本や絹本の典籍や什物を、高野山の厳しい自然環境から護る入れ物として最適といえるでしょう。

分厚い材木は盗賊の侵入防止にも有効だったと思います。土蔵の土壁は叩くと比較的崩れやすいのですが、大きな木材に穴を開けることは容易ではありません。床下を見ると根太がほとんど隙間無く並べられています。これも防犯目的の工作のように思えます。

貴重な聖典を災いから護り伝えるための知恵と工夫がこの経蔵には込められています。

大石楠花の手前で左に目を向けると、鬱蒼とした木々に囲まれた重要文化財の「経蔵」が見えます。経蔵の左手には、しめ縄の巻かれたひとときわ大きな杉が聳えています。火除けの神「鼻張尊」が降り立ったご神木とされています。その御利益に護られ、経蔵は八百年間、聖教什物を秘蔵してきました。

経蔵は正面四・五m、奥行き三・五mの「校倉造」という形式の倉で、十三世紀初め、国宝多宝塔と同じ頃に建てられたと考えられています。

校倉は奈良東大寺の正倉院が有名です。奈良時代には大寺や地方の役所にたくさん建てられたようですが、平安時

代以降は土蔵が普及して校倉は激減します。平安時代以降、室町時代までに建てられた校倉は現在四棟しか残っていません。その一つがこの金剛三昧院校倉で、とても貴重な存在です。

経蔵は、礎石の上に長さ五〇cmほどの太くて丸い束柱を建てて土台を組んでいます。通風を考えた高床の倉庫となっていて、土台には根太を渡して厚い床板を張り、その上には断面五角型の角材、「校木」を井桁に組み合わせ、それを十五段積み上げて箱形の倉の本体を造っています。「校倉造り」と言われるゆえんです。

校倉造りには柱はなく、積み上げられた校木が壁であると同時に、荷重を受ける柱の役割も果たしています。柱と梁で組み建てる日本の伝統木造建築の中にあつて、これほどとも特殊な構造ですが、地球規模で見渡すと北半球に広く点在していて、その伝播とルーツの探求は興味あるところ

です。

校木を積んだ上には、屋根を形造り、その上に檜皮を葺いていきます。屋根を造るとき、普通は屋根の勾配に合わせて、一定間隔で垂木という部材を配置しますが、ここでは垂木の代わりに分厚い板をビッチリと張り詰めています。これは「板軒」という形式ですが、こんな厚い板を用いるのとても珍しいものです。

床から壁、屋根まで分厚い材木で囲まれたこの経蔵は、まるで大きな木の箱です。木箱は温湿度の急激な変化を和らげる特質があるとされていて、この建物は紙本や絹本の典籍や什物を、高野山の厳しい自然環境から護る入れ物として最適といえるでしょう。

分厚い材木は盗賊の侵入防止にも有効だったと思います。土蔵の土壁は叩くと比較的崩れやすいのですが、大きな木材に穴を開けることは容易ではありません。床下を見ると根太がほとんど隙間無く並べられています。これも防犯目的の工作のように思えます。

貴重な聖典を災いから護り伝えるための知恵と工夫がこの経蔵には込められています。

小仏塔の世界⑥

一石五輪塔の語り (続編)

公益財団法人 元興寺文化財研究所
狭川 真一

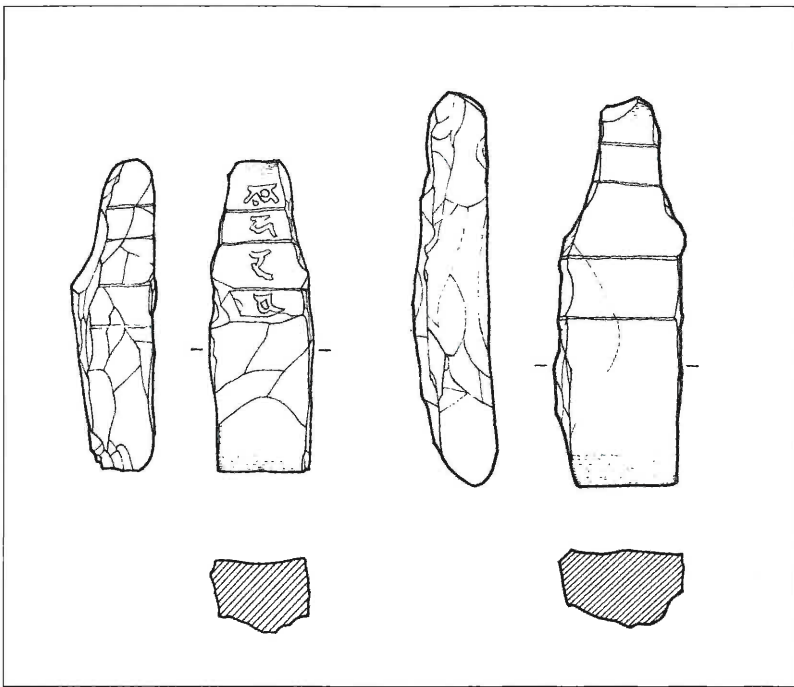


図1 高野山奥之院出土の簡素な一石五輪塔 (1 / 5)



写真1 奥之院の簡素な一石五輪塔

一石五輪塔が姿を消す頃

高野山の一石五輪塔は、戦国時代末期(一六世紀末期)頃に終わりを迎えます。これは銘文を刻んでいる塔のデータです。一石五輪塔はその初期の頃から銘文を刻まないもの(墨書きのため消えたものも含まれます)がたくさんあり、その数は銘文のあるものの数倍以上に及ぶと考

えられます。その中に五輪塔の形とはほど遠い姿をしていながら、五輪塔を意識して作ったと思われる簡素な一石五輪塔があります(写真1)。

図1は、奥之院出土の簡素な一石五輪塔です。この図をご覧ください。五輪塔が、長さ二〇センチ前後で片面は平滑に仕上げられているもの、その側面や反対面は粗く加工するだけで終わっています。このような一石五輪塔が少なからず含まれているのです。その形はまさに「鯉節」。削っている面のみ平滑になっている様子を思い出してください。

このタイプの一石五輪塔の作り方は、まず平滑な面を持つ石を探します。その石の周囲を粗く叩いて形を仕上げます。その後、平滑な面に細い線を四本引いて表面を五分割します。一応、下部の地輪にあたる部分は広く、上部の空風輪に該当する部



写真2 明王院境内の一石五輪塔群（一般公開してられません）

分は狭くなるよう線を入れていきます。線と言っても点の集合体のようなもので、トントンと繋つなぐようなもので叩いて線を刻んでいる程度です。これで完成です。この中にも丁寧な一群があり、各部に梵字らしきものを線で描いています。

一石五輪塔に変わりはありませんが、あまりにも簡素な作りのうえに、今までたくさん確認されているにも関わらず、銘文の入っている資料は見つかっていません。つまり、具体的な年代が分からないのです。石塔の簡素化は、時代の流れにしたがっていると考えることができそうですから、戦国時代（一六世紀）の末期に

消滅したタイプよりもさらに遅れて出現するタイプではないかと考えています。つまり、戦国時代の終わり頃に出現して、江戸時代（一七世紀以降）に入っても作られ続けていた塔なのではないかと思われれます。

明王院の一石五輪塔群

高野山壇上伽藍の北側にある明王院の境内に、簡素化された一石五輪塔が数千基あまり祀られています（写真2）。奥之院の調査で出土したものもあり、さらに簡素化が進んだものも河原石を割っただけのようなもの



写真3 明王院の簡素化が進んだ一石五輪塔（わずかに線で区分する）

は、これが一石五輪塔なんだろうかと思ってしまうような形をしています。表面は割った時の面を特に平滑にするわけでもなく、写真4のほうは線を入れて分割するわけでもありません。しかし、現在まで大切に祀られ続けていることから、このような形でも十分に機能を果たしていたものと思われれます。

さてその機能ですが、一石五輪塔の流れから考えると納骨に伴う供養の標識としての役割が考えられます。そうすると高野山の納骨は、奥之院だけでなく子院でも行われるようになっていたことを明王院の資料は教えてくれます。



写真4 明王院の簡素化が進んだ一石五輪塔（区分線も入らない）

また、この時代の墓地に立てられた標識をみますと、たとえば隣の奈良県では戦国時代に石仏による供養が行われますが、その後、江戸時代に差し掛かる頃に舟形五輪塔という光背を背負ったレリーフの五輪塔が出現します。そして次には、光背型だけが残ってレリーフの五輪塔は無くなり、そこには戒名や没年月日だけが記載されるようになります。墓の主流を占めていた仏塔が墓から消えてしまうのです。つまり、もはや供養のシンボルに塔は必要なくなり、戒名こそが重要になってきたことを示しています。

その流れを簡素化が進んだ一石五輪塔にあてはめてみると、塔としての形や意義を失って、おそらく表面に墨で戒名を書いたか、戒名を書いた紙を貼り付けるなどの行為で十分に供養の目的を果たせたのだろうと思うのです。

そしてこの流れの先に、位牌による供養があるとする指摘があります。位牌の研究は遅れていますので、今後は位牌による供養の開始年代を調べることで、簡素化が進んだ一石五輪塔の具体的な年代を調べることで、高野山における納骨信仰の流れを切れ目なく知ることができると思っています。

「古絵図で巡る高野山探訪」 (その七)

奥之院―墓地①

奥之院の墓地の成立

高野山で墓地といえば、一の橋から弘法大師空海が入定する御廟まで

の参道沿いに広がる墓原「奥之院」が念頭に浮かびます。

奥之院の景観は、『霊宝館だより』一二二号(平成二十九年四月十八日



図1 「高野山内絵図」(奥之院部分) 正保3年(1646) 金剛峯寺蔵

発行)の『古絵図で巡る高野山探訪』(その四)「奥之院―参道」でも紹介しましたが、弘法大師空海が入定された承和二年(八三五)直後に成り立ったものではなく、千二百年もの長い年月を経て、現在のような私たちが目にしているものとなりました。『高野山内絵図』(正保三年(一六四六) 金剛峯寺蔵、図1)やいくつかの古絵図には、時代毎の奥之院が描かれています。

墓地には主に、「五輪塔」と呼ばれる石塔が供養塔として建立され、その大きさや構造は様々です。

五輪塔の出現は十二世紀中頃ですが、現在のところ、高野山では五輪塔の年号や形式から最古のものは十三世紀中頃のもので、入定の約四百年後、奥之院に納められるようになったと考えられます。

末法思想の流布

では、なぜ奥之院が現在のような墓地となったのでしょうか。それは、墓地ができる前段階に起こった仏教

史上の大きな出来事の影響によりです。

お釈迦さま(ゴータマ・シッタールタ)が亡くなり(入滅)、その後、「正法」、「像法」、「末法」という時代が順に訪れるという考えがありました。「正法」とは、お釈迦さまの教えが伝わり、悟りも開くことができる時代。「像法」とは、教えは伝わるが、悟りを開きにくくなる時代。「末法」とは、教えも伝わらず、また悟りも開くことができなくなる時代です。

墓地ができる前段階の平安時代(十一世紀)、当時の人々は世の中が「末法」の時代に入ったと考え、そのため社会不安が広がりました。このような考えを「末法思想」といい、当時の人々は経典を書写して、各地の聖地の地中に埋納して「経塚」を造立することで、仏教を後世に伝えるようにしたのでした。和歌山県では上皇、貴族らの参詣も手伝って、南紀の熊野地域の本宮・新宮・那智大社が、また紀北に位置する高野山も経塚の造立の聖地とされました。

経塚の造立

高野山は、当時すでに弘法大師空海が入定する特別な聖地として広く知られ、その結果、皇族や貴族らを中心に奥之院御廟周辺には経塚が営まれました。その中でも、奥之院御廟に近接して出土した「重文 高野山奥之院出土品」の比丘尼法薬経塚出土品(図2〜7)は永久二年(一一一四)に埋納されたもので、末法思想により経塚に納められた納入品の内容や納入の背景を具体的に窺い知ることができません。残念ながら、経塚遺構の詳しい構造は不明ですが、一般的に経塚は地中に設けら

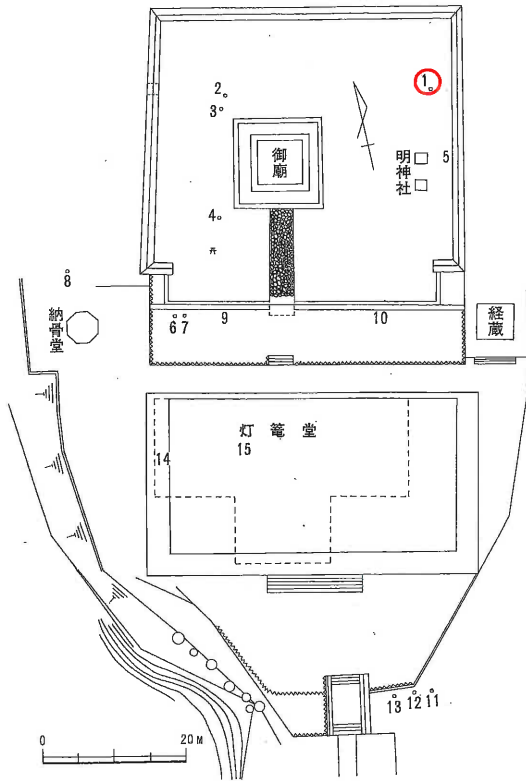


図2 奥之院比丘尼法薬経塚出土位置図(○印)

れた石を組んで作られた石室を持つことから、比丘尼法薬経塚も同様に石室を持ち、その中に納入品が納められた可能性があります。出土した遺物の出土状況は「陶製外容器」の中に、「鑄銅経筒」を入れ、その中に黒漆を施した「漆塗木製内容器」を納めていました(図3)。さらに「漆塗木製内容器」の内部には、「願文」(図4)、「供養目録」(「妙法蓮華経」(図5)、「無量義経」(「観普賢経」)、「般若心経」(「阿弥陀経」)が「経帙」に巻かれ(図6)、内部の底には「金剛界種子曼荼羅」(「胎藏界種子

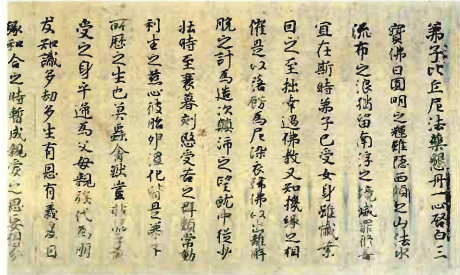


図4 「願文」



図3 比丘尼法薬経塚 (漆塗木製内容器・鑄銅経筒・陶製外容器)



図5 「妙法蓮華経」



図7 「胎藏界種子曼荼羅」

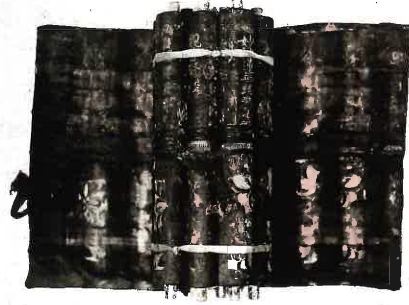


図6 経帙と経巻包納状況

曼荼羅」(図7)、「法華種子曼荼羅」が畳んで納められていました。これらの経典を納めた願主は、「陶製外容器」(「願文」(「供養目録」)に比丘尼法薬という人物の名前が記されていることからわかります(図4)。

当時の高野山は女人禁制の地でした。そのような場所に、女性が、しかも弘法大師空海の御廟のすぐそばに経塚を営むことができた人物とはどのような方だったのでしょうか。残念ながら人物像に関する詳細は不明ですが、当時かなり身分の高い人であったことは間違いありません。推測ですが、時の天皇のお母さまなど特別な方の可能性があります。

(鳥羽正剛)

高野山の文書 (十三)

跋文と寄進状からみる国宝『聾瞽指帰』(金剛峯寺蔵)の伝来

海^{かい}の真筆として広く知られ、高野山の秘宝として霊宝館に収蔵されています。そのため、弘法大師が延暦十六年(七九七)に二十四歳で著して以来、その後は高野山に収められているとイメージする人もいるかもしれませんが、

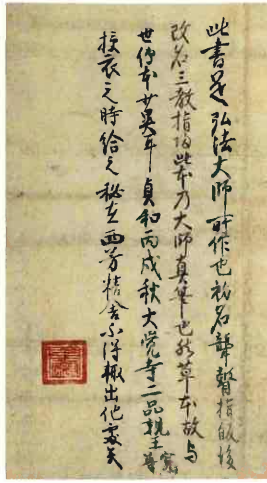
室町時代の天文五年(一五三六)に高野山に寄進されたことが当時の寄進状によって判明しています。今回はこの寄進状と聾瞽指帰下巻末に記

された、禅僧、夢窓疎石(一二七五～一三五二)による跋文(あとがき)から『聾瞽指帰』の伝来を紹介します。

『聾瞽指帰』跋文によると、貞和二年(一三四六)秋に大覚寺二品親王(かみまろ)尊(？)一三八二より夢窓疎石が賜り、京都の西芳寺(苔寺)に秘蔵したことが記されています。夢窓疎石は、醍醐天皇(一二八八～一三三九)や足利尊氏(一三〇五～一三五八)の尊崇を受け、醍醐天皇が崩御した際には天龍寺を建立し、尊氏に天龍

寺船派遣を献策した事で有名です。次に、『聾瞽指帰寄進状』によると、弘法大師真筆の三教指帰(『聾瞽指帰』を指す)は、もと京都仁和寺本院の経蔵に安置されていたものが、不慮の出来事で失われていたようです。それを堺の宿院の前田仲源五郎源正朝という人物が私財を投じて入手して、天文五年(一五三六)三月二十一日に高野山御影堂に寄進したと記されています。このように、跋文と寄進状から、一三四六年には西

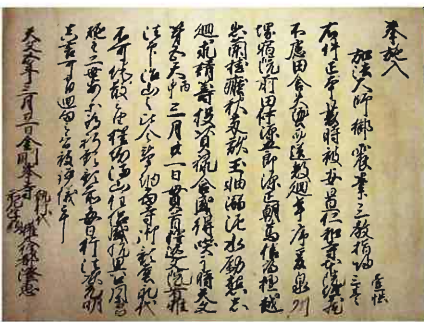
芳寺に収められ、一五三六年までに仁和寺に移り、高野山御影堂に寄進されたことがわかります。では、その間の約二百年間はどのようなのでしょうか。室町時代の日記、『臥雲日件録跋尤』には、日記の著者である禅僧、瑞溪周鳳(一三九二～一四七三)が、長祿四年(一四六〇)に西芳寺を訪れた際に、空谷明応(二三二八～一四〇七)という禅僧が生前愛読していた書籍のなかから『聾瞽指帰』を発見したとあります。このことから、西芳寺に収められたのは、少なくとも約百二十年間はそのままと西芳寺に秘蔵されていた事がわかります。そして、一四六〇年から一五三六年の間に西芳寺から仁和寺へ移り、最後に高野山に寄進されたと考えられます。この間、京都では応仁・文明の乱(一四六七～一四七七)が勃発し、西芳寺も仁和寺も戦禍によって焼失してしまいます。これが原因で『聾瞽指帰』はその居場所を転々として、高野山に寄進されたのかもしれない。



国宝 聾瞽指帰 巻末跋文

〔跋文 翻刻文〕

此書是弘法大師所作也、初名聾瞽指帰、後改名三教指帰、此本乃大師真筆也、然草本故与世伝本少異耳、貞和丙戌秋大覚寺二品親王尊寛/授衣之時給之、秘在西芳精舎、不得輒出他処矣



聾瞽指帰寄進状

〔寄進状 翻刻文〕

奉施入

弘法大師御震筆三教指帰三巻、右件正本、曩时被安置仁和寺本院経蔵、不慮田舎失墜而送教廻年序、爰泉州/堺宿院前田仲源五郎源正朝篤信為檀越、悲蘭桂壓秋艾、歎玉軸瀟泥水、勵懇志/廻求請籌、投資緑合感得咲、于時天文/第五天西三月廿一日、貫首釈迦文院宥雅/法印治山之比、令奉納当寺御影堂、永代/不可他散之由誓約、満山住侶感悦、異口同音而/施主二世安業為祈願、影前毎日行法次、光明/真言可有廻向之旨、被評議畢/天文五年三月廿一日 金剛峯寺執行代 権大僧都澄恵 前左掌頭

〔研谷昌志〕

※春期企画展では今回紹介した『聾瞽指帰』(複製)、『聾瞽指帰寄進状』を展示します。

高野山霊宝館からのご案内

各種イベント報告

◎文化財防火デー 消防訓練

1月26日

(金) 記録的な大雪の中、高野町や金剛峯寺の消防団員らによる啓発パレードと消火訓練が行われました。



蓮池での放水訓練

◎平成29年度 重要文化財(建造物) 上杉謙信霊屋保存修理完了

3月27日

(火)をもって保存修理事業が完了しました。今回の修理では、平成7年以来22年ぶりに檜皮屋根の全面葺替が行われ、新しい檜皮の屋根が美しく輝いています。



◎重要文化財(美術品) 十巻抄 第一巻修理完了

平成29年度より5ヵ年計画で、文・十巻抄(円通寺)の修理が行われています。今年3月に第一巻の修

理が完了し、今後順次修理が行われていく予定です。

◎重要文化財(美術品) 不動明王・二童子毘沙門天図像 修理

重文・不動明王・二童子毘沙門天図像(円通寺)の修理が平成29年度より3ヵ年計画で行われています。

◎重要文化財(美術品) 快慶作 四天王立像のうち持国天・增長天 修理完了

平成28年度

より修理が行われていた、快慶作四天王立像のうち2躯が修理を終え、今年3月30日(金)より新館で展示が再開されています。既に修理を終えた広目天・多聞天像と共に、当館で4躯揃ったの展示は約2年ぶりです。



展示風景

◎国宝 仏涅槃図 愛知県立芸術大学による模写完成と奉納式

平成30年4月13日(金)

愛知県立芸術大学によって制作さ



〔参考〕 仏涅槃図(国宝) ※ 展示していません

れた、仏涅槃図(国宝、金剛峯寺蔵)の原寸大現状模写が完成し、金剛峯寺に奉納されました。模写図は当館に収蔵され、7月7日(日)まで本館紫雲殿にて展示中です。(奉納式の様子は次号で紹介いたします)

◎ミュージアム法話 年間予定

毎回ご好評いただいております「ミュージアム法話(お坊さんによる法話と展示解説)」を、本年度も開催いたします。

◎友の会会員募集

高野山霊宝館では友の会会員を随時募集しております。

- ・ 会員証提示で会員本人のほか同伴者3名様まで霊宝館と金堂・大塔の拝観無料
- ・ 年4回発行の機関誌「霊宝館だより」送付

〈年会費〉

一般会員(個人) 3,000円
賛助会員(法人) 30,000円

皆様のご入会をお待ちしております。

〈お問い合わせ先・申込先〉

高野山霊宝館 霊宝館友の会係
(電話)0736-56-2029

- ・ 5月12日(土) ・ 6月16日(土)
 - ・ 7月7日(土) ・ 7月21日(土)
 - ・ 8月4日(土) ・ 8月18日(土)
 - ・ 9月15日(土) ・ 10月20日(土)
- ※ 参加費無料、要拝観料。いずれも13時より。変更の場合あり。

◎宝物貸出情報

○京都国立博物館

特別展「池大雅 天衣無縫の旅の家」

平成30年4月7日(土)～5月20日(日)

国宝 山水人物図巻 池大雅筆

十面 遍照光院蔵 通期展示

(期間中一部展示替あり)

江戸時代に活躍し、奥之院にある芭蕉句碑を揮毫した事でも知られる池大雅の傑作です。十面すべて展示する貴重な機会です。

イヌツゲ・犬黄楊 あおつげ・青黄楊

元高野山高等学校長 亀岡 弘昭

イヌツゲはモチノキ科・モチノキ属の常緑小高木です。雌雄異株で、初夏に白い小さな雌花と雄花が別の株に咲き、雌花は果実を結び、秋に黒熟します。

他の樹が生えにくいような日当りのよい尾根筋や斜面の乾燥地、高木林内の下層樹としても生育し、耐乾



小さな葉の密生した樹冠

性と耐陰性を兼ね備えています。

移植が比較的容易で、幹の上部を切り取ると盛んに分枝して葉を密生し、刈り込みに強く、樹冠を色々な形に整形できることなどから庭木や盆栽としても植栽され、身近な樹として親しまれています。

幹材は、印材、各種細工物、道具の柄などに用いられている(いた)そうです。

イヌツゲという和名の由来は、常緑小高木で外見が似ているツゲ科・ツゲ属のツゲ(黄楊・栢植)と比べ



幹や枝や刺状の枝先

て材質が劣るといふことによる、犬黄楊です。ツゲは幹材が硬く細密で櫛、印鑑、ソロバン玉、将棋の駒などの用材として重宝され、数珠材としてもつかわれています。

イヌツゲのように和名をイヌ〇〇とされている樹は、ほとんど例外なくといってよい程に、外見が似ている他の樹種と比べて、材質が劣る、役に立たない、見劣りする、などが命名の由来となっています。

高野山塊に自生する樹のうちイヌツゲ以外の例ではイヌガヤ(犬梅擬イヌシデ(犬幣・犬

四手)、イヌブナ(犬撫)、イヌザンショウ(犬山椒)、イヌウメモドキ(犬梅擬)などがあります。

植物の方言名は、その地方・地域の貴重な文化遺産となりつつあります。イヌツゲの高野山近隣で

の方言名について「紀伊植物誌」には、ねずのき、つづろぎ、かまこぶしなどが記載。ねずのきについては、柴を薪につかうと家にネズミがふえるといつてきらう、つづろぎには小枝が密に出るので密生した山に入ると着衣がぼろぼろに破れて、つづろぎのようなになる。かまこぶしには材質硬く小枝がむやみに張っているので、焚き柴としてかまどにささくべの時かまどのふちなどをきずつけがちであると付記されています。つづろは古語のつづれ(破れを縫いつくろつた衣服、ぼろ)の転訛では。

全国的には、方言名の多い樹の一つです。それらのうち、花や花弁によると思われる、こめごめ(米米)、小さな葉による、よめがさら(嫁が皿)、樹形からの、うさぎかくれ(兎隠れ)、古い小枝の先が刺状となり触れると痛いことによる、とりとまらず(鳥不止)、樹皮の色によるあおつげ(青黄楊)、やまつげ(山黄楊)、にせつげ(偽黄楊)などがあります。